
幻象画 (?)

絵夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻象画（？）

【Nコード】

N5622T

【作者名】

絵夢

【あらすじ】

高校生時代の恋人同士が三十年の歳月を経て再会した時、男は、まだ無名ながら画家に、女は、その美貌と相俟って、広く世間に知られた歌手になっていた。

運命の系に操られるように、二人は、それからの人生をともに歩き始める。

思いがけず、イギリス・ロンドンで個展を開く事になった彼らは……。

再会からロンドンでの個展まで

1、不凍湖

3日ほど前から降り続いてきた雪は、深夜になって漸くその勢いを弱める気配を見せ始めていた。重く圧し掛かってくるような暗い鼠色の空も、ほんの少し明るくなってきた。

やがて夜明けを迎えようとする頃には、未練げに舞っていた雪の妖精たちも、ひとときの眠りに就くのか姿を見せなくなっていた。空一面を覆っている雲の仄かな明るさに朝の訪れを感じる事が出来る。雪原に散りばめられた木立の影が少しづつ濃さを増してきた。その分、新雪の清らかな白さが鮮やかになってくる。

岸边に寄せる漣の小さな音が、周りの静けさをより一層際立たせている。湖畔を時折、風が思い出したように粉雪を巻き上げながら渡って行く。

北海道・苫小牧市郊外にあるウトナイ湖は、湖底のどこからか豊かな湧き水があるためだろうか、どんな厳しい冬でも決して湖面が氷に覆われることはない。

夏ともなれば、岸边の何ヶ所かにキャンプ場が開設され、色とりどりのテントや、子供たちの歓声で賑やかな湖畔も、歌声や小鳥達のさえずりさえ一面の雪の下に押し隠して、ひっそり佇んでいた。

湖畔に忘れ去られたようなベンチが一つ置かれていた。そこに、そっと肩を寄せ合う男女がいた。まだ雪の激しかった昨日の夕方ころから、じっと座っていた。お互いを見詰め合う眼は、いまはもう何も映してはいない。

ダークグレーの雲間から、一瞬、奇跡のような光芒が射し込んだ。それは、周りを覆っている冷気を鋭く切り裂き、温かな安らぎさえも感じさせる不思議な、強い光であった。そのまばゆいばかりの光

の帯を二人は手を取り合つて渡つて行つた。輝く光の中で、繋ぎ合う手にほんのわずか力を込め、微笑みを交わしながら。

湖はまた、静寂の世界に戻つた。

男・二階堂昌幸は、幻想の画家として、女・その妻、麗華は。歌手・秋月麗華として、ともにその名はよく知られていた。

「すまない」

「言わないで。再会した時から、それより、生まれた時から、こう言うさだめが出来ていた気がするの。それに、わたし自身があなたとこれからもずっと一緒にいたいから」

「つぎの世界もきつと一緒に生きていかれる。僕は、それを心から信じている。だから、いま、穏やかな気持ちで、今度もよろしくと言つよ」

「そうね、わたしも信じてるわ」

これが、三時間ほど前の二人の最後の会話であつた。

2、初恋

二人の物語は、今から四十年ほど前にさかのぼる。

一才違いの二人は、高校生であつた。人並みから見れば遅かつた初恋だつたからか、強く惹かれあい、お互いの心の中に深く刻み込まれた。しかし、初恋は結ばれないと人が言うように、ほんの一年ほどの清らかな、はかない交際で二人は、自然に離れていった。お互いの刻印を心の奥底に深く残したまま。

バス通学の昌幸が、停留所に向かう途中時折見かける美しい少女のことを、いつのころから意識していたのか、彼自身はつきりとした記憶はない。

出会つた誰もが緊張感にも似た感覚を覚えるほどの美しさ。道で擦れ違つた人がうつとり見入ってしまうような、若さ溢れる存在感。

遠くから眺めていても思わず引き込まれてしまいそうな明るい笑顔。彼女と話している同級生たちも皆、上気したような表情を浮かべている。それほど彼女は美しく輝いていた。

そんな状況の中で、彼はまるで映画スターを眺めるように、遠い存在として羨望と憧れのような気持ちで彼女を見ていた。

それは、三月の冷たい風が強く吹き付ける朝のことであった。

通学のためバス停に向かっていた昌幸は、途中、彼女と擦れ違った。

眩しさと、思春期特有のテレであろうか、思わず目を伏せた彼の耳に、突然、爽やかな声が届いた。

「バス、全然来ないのよ」

えっ？何？。夢の中で憧れのスターに突然話しかけられたように、現実が理解できない彼は、思わず周りを見渡した。

「あなたに話し掛けたのよ。昌幸さんでしょ」

「え、ああ、そうだけど」

応えている彼の言葉は、少し擦れている。そんな様子を見て、彼女は、くすつと小さく笑うと言った。

「わたし、バス停で四十分も待っていたの。でも、全然来ないから、兄に車で送ってもらおうと思って。あ、わたし、麗華、秋月麗華。よろしくね」

「じゃ、母がよくお邪魔している秋月さんの？」

「そうよ。中学二年の時引越してきたのよ」

彼は、この頃になって漸く少し落ち着きを取り戻してきた。

「知っているみたいだけど、僕、二階堂昌幸です。こちらこそよろしく」

こんな何でもない会話を二言三言と交わすうちに、二人の間は急速に打ち解けていった。

「ねえ、数学とか物理とか、お勉強教えてくれない？」

「ええっ？僕なんかじゃ駄目だよ。それに、きみの家だったら家

庭教師とか、大学生のお兄さんがいるんじゃない……」

「ずっと前から、あなたと道で擦れ違う度にお願ひしようって思っていたのよ。駄目？」

「そりゃ、僕なんかでよければいいけど」

こうして、毎週土曜日の午後と日曜日は、ほとんどどちらかの部屋にいたことになった。

初めて言葉を交わして一月ほど経ったある日、机上に置かれた分厚い『詳解・大辞林』に目をやりながら、彼が言った。

「あれと同じ辞書を持っているんだけど、交換しない？」

当時、恋人たちが互いの腕時計を交換することが流行っていた。彼にしても、何か彼女のものを持っていたという軽い気持ちであった。

「……いいわよ」

彼女は、にこつと笑みを見せると手渡した。受け取り、表紙を開いた彼の手が止まった。

「あつ、……駄目だ、駄目だよ。こんな大切なものは……」

そこには、『学長賞・啓明学園高等部』と金色の文字が並んでいた。

「いいの。大事なものだから昌幸さんが持つてて。裏表紙の所にちゃんと名前が書いてあるわよ」

この辞書は、彼の一生を通しての大切な宝物になった。

楽しそうな二人の交際を親たちは、ただ微笑ましく眺めていた。

少しは勉強したり、トランプ占いをしたり、音楽を聴いたり、テレビを観たり、学校のこと、友達のこと、将来のこと、楽しい話には尽きることがなかった。一緒にいるだけで二人は幸せだった。高校生同士というには、あまりにも幼い交際であった。

登下校で偶然同じバスに乗り合わせた時の笑顔、一緒に観たテレビの番組、彼女が夏休みに家族旅行で行った北海道の土産が何だったか、彼は何年経っても覚えていた。

庭先から声が聞えた。

「クリスマスパーティーしようってお友達が来ているの。あなたも来てよ」

そんな彼女の言葉、声はいつまでも彼の脳裏から消えることはなかった。しかし、やがて一年が過ぎようとするころ、自然に二人は離れていった。お互いの存在を意識の奥にかたくしまいこんで。理由は、はっきりしないままで。

やがて、高校を卒業した昌幸は、小さな会社に勤めながら、麗華と逢わなくなつた頃から描き始めていた油絵に、のめりこむようになり、まるで何かをふつきろうとするような様子で取り組むようになった。そんな彼を、本棚に並べられた一冊の分厚い辞書が静かに見守っていた。

昌幸にとつて、麗華との楽しかった一年は、夢の中の出来事だったとしか思えなかった。ただ、この『大辞林』だけが、現実に生きたことの証であった。

風景の細密描写に魅力を感じていた彼は、日曜日や、2、3日の休みの度にあちこちスケッチに出かけるようになった。小旅行と油絵が彼の大切な趣味と言えるようになっていった。

五年の歳月が流れた。

スケッチ旅行で銚子を訪れていた昌幸は、その夜の宿にしていたユースホステルの談話室のテレビを見るともなく眺めていた。司会者の軽妙な話術で高い視聴率を得ている、ある歌番組が流れていた。記憶のどこかを刺激される歌声が耳に飛び込んできた。彼は、不意に突き上げてくる何とも言えない甘酸っぱいような感覚に戸惑いながら画面を見た。

そこに、麗華がいた。

伸びやかで澄み切った高音、哀愁に満ちたビブラート、豊かで温

かみを感じさせる低音域。未だ目の前の光景をそのまま現実として受け止めることが出来ない昌幸の動揺をよそに、彼女は歌い終わった。

司会者の話しでは、これがテレビ初出演ということであった。画面の彼女は、恥じらいに頬を染めながら、やや緊張した表情を浮かべ、あの頃にも増し美しくなつてそこにいた。彼は、ズームアップされた彼女の眼をじっと見詰めていた。

「……麗華……」

「昌幸さん元気だった？ 驚いたでしょ、成り行きでこうなつてしまつたのよ。本当はわたしが一番驚いてるのよ」

これはテレパシーと言うのであるうか、脳の深いところで直接感じた言葉であつた。

この出演を機に、麗華は一気にトップ歌手への道を駆け上がった。テレビ出演は急激に増え、歌う曲は必ず大ヒットした。街に流れ、テレビから聞えてくる歌を知らず知らず口ずさむ毎日であつた。

住んでいる世界が違つてしまつた淋しさを紛らすように、益々彼は絵の創作に打ち込み始めた。

「美しくなければ絵画とは言えない」、そんな気持ちでキャンバスに繊細で美しい世界を作り上げていった。

数年が経ち、テレビや週刊誌が麗華の結婚を報じた。画面や写真の彼女は輝いていた。昌幸の実家では母が麗華の結婚披露宴の引き出物を自慢げに見せたりした。しかし、その頃の彼の心に動揺はなかつた。ごく自然の成り行きと受け止め、彼女の幸せを願うことが出来た。

そんな彼を、少し焼け、色が変わり始めた『大辞林』が、相変わらず静かに見守っていた。

さらに数年が経ち、彼女に歌声はあまりテレビから聞えなくなつていった。

3、遺伝

昌幸は仕事の傍ら自分の絵画の世界を求めて一生懸命描き続けた。遠い道程であった。彼は生まれつき大きな障害を負っていた。

絵を描こうとすればするほど否応なく直面する、致命的ともいえるような障害であった。

彼の目では、赤、緑、茶の三色が殆んど識別できなかった。強度の色弱であった。大病院での検査では、第二色覚異常と診断された。これは遺伝であって、治療する方法はない。日常生活ではあまり不都合を感じることはないが、就職、運転免許証などで痛切にそのハンディを意識させられる。

この第二色覚異常も、その程度には大きな個人差があるようで、彼の場合、相当強い。濃度がほぼ同じなら、絵の具のラベルを確認しないと、赤、緑、茶が識別できない。

色弱は、検査方法から想像出来るように赤、緑、茶の小さな点が様々な色と混ざり合った時、識別が出来ないと言われている。彼自身何度も経験している。しかし、その程度も彼ほどになると、色彩そのものの認識力が弱いようで三色以外の色彩も強く影響を受け、その見え方は、かなり曖昧である。そんな強度の異常を持って絵画に楽しさを見い出そうというのはまるで無謀なことのように思われる。

それは、味覚を失った人が料理を作るようなものである。料理は、素材そのものの他に視覚、触覚、嗅覚なども重要な要素ではある。しかし、調理する者の味覚が最も大きなウェイトを占めることは言うまでもない。

絵画においても同様なことが言える。モチーフ、画材、感性、技術と、多くの構成要素がある。しかし、それらを的確に表現する色覚に異常があるとなると、やはり、致命的と言わざるを得ない。不思議なことに、墨の濃淡で美的な世界を構築する水墨画においても、微妙な色彩感覚が要求される。

絵に打ち込めば打ち込むほど、彼の胸中には、不安、悔恨、もど

かしさがつきまとった。

「そんな目でどうして絵なんか描くのか」と、友人たちもあきれていた。

しかし、彼は絵が好きであった。描くことが大好きであった。キヤンバスに向かい、一心不乱に筆を動かしている時こそが幸せであった。

そんな彼の絵画に、ある日転換点と言えるような一つの重大な変化が訪れた。

これまで彼は、主に、札幌、金沢、仙台などの町並みをモチーフにした風景画を描き続けていた。コンクリートジャングルや、古い町の佇まいに題材を求め、そこで暮らしたり働く人たちを全く描かないことで却ってその存在感を際立たせようと腐心していた。

五月中旬のある日、職場の慰安旅行で長野県上高地へ行くことになった。アルコールを殆んど受け付けない体質の彼にとって、騒がしく煩わしいだけのバスを降りた瞬間、それは突然にやってきた。

頂にまだ雪を乗せた穂高連峰の美しく厳しい表情に、彼は瞬きすることも出来ず、ただ立ち尽くしていた。眼も、耳も、身体中総ての感覚が巨大な手に鷲掴みされたように、大自然の迫力に圧倒され、麻痺させられたような気分であった。言葉も出ない。三十分ほども佇立していた彼は、呪縛を振り払うように頭を振ると、慌てて四囲を見回した。眼前には、飽くまでも澄み切った梓川の豊かな流れ、目線を少し上げれば、所々に残雪を抱いた山の懷まで続く新緑、もつとも、彼には新緑のイメージは掴めなかったが。その若々しく清潔な美しさだけは心で直に感じ取れた。無心で自然の息吹と厳しさの中に身を置いた彼の心に、猛烈な意欲が沸き起こった。

「これを描いてみるんだ。いままで長い間意識的に避けてきた大自然の表情から目を逸らしては駄目だ」

心の内に強い創作衝動が渦巻く。
「逃げるな」

穂高の風が厳しい声を掛けてくる。これほどの創作意欲を覚えた

今こそ、自分の上高地を描くチャンスかもしれないと感じた彼は、一泊するのももどかしく思い、幹事に断ると急遽自宅に帰った。

真っ白なキャンバスを前に早速コンテを使ってイメージを置いてみる。今までの町並みなどに較べれば、デッサンと言えるようなものでもなく苦勞する間もない。荒々しい穂高連峰や森林帯、梓川が滑るように黒い線で再現された。

ここからが彼には大変な作業になる。岩場、土砂、這松、樹林帯、どれをとっても色合いのイメージは浮かんでこない。梓川の流れ一つを思い描いても、木々が川面を覆っている所は豊かに緑を写しているであろう。透き通った川底の石も見られる。僅かではあるが川藻のあるところも微妙な緑の筈である。森林帯にしても、若葉の間には枝や幹だつて散見されるであろう。岩場はまだしも、土砂の部分と這松のはえている所などの識別は彼には全く出来ない。当然のことには色調のイメージは結ばれない。二時間ほど思い悩んだ彼は、ふっと小さく息を吐くと、気忙しくパレット、絵の具などの一式を広げた。描きながら考えようと決めたようである。

試行錯誤を重ね、一月ほど心血を注ぎ込んで十五号の作品『穂高遠望』は完成した。昌幸にとって、自然をモチーフにして初めて描いた作品である。

しかし、意を決してサインを入れたものの、まだ確かな自信は持てないでいた。あの時、上高地で感じた穂高の厳しさ、美しさは充分表現出来たと思う気持ちの端から、緑は新緑であるうか、這松は枯れていないだろうか、どのように角度を変えても、どんなに眼を凝らしてみてもどうしても自分には判らない。そのもどかしさは彼を苦しめた。悔しさが募った。描かなければよかったと本気で思う日々が続いた。自分の眼を、色覚異常を呪うような気持ちであった。二ヶ月経つてもその絵を眼にするととても新しい作品にチャレンジ出来るような精神状態ではなかった。そんな状況が益々彼を落ち込ませた。

ある日、仕事を終え帰宅した彼は、その絵に眼を留めると、発作

的にパレット・ナイフを手に取り切り裂こうとした。そのナイフを右手に持ち替えようとして一瞬視線が揺れた。その網膜に、麗華のレコードが飛び込んできた。ジャケット写真の彼女の瞳が瞬間的に強い光を放った。

「お願い、やめて！いままでの苦労を無駄にしないで」

麗華の叫び声を聞いたような気がして、彼は冷静さを取り戻した。そして、絵をイーゼルから取り外すと、自分の眼に触れないように押し入れの奥深くに仕舞った。

それから一月ほど経った頃、一枚の往復ハガキが舞い込んだ。高校のクラス会の案内であった。それを手にした時、ある考えが浮かんだ。

「そうだ、美術部の部長をしていた高松に見て貰おう」
徐に受話器を取った彼に、友人は快く引き受けてくれた。

電話で連絡をした五日後、昌幸の家に三人の来客があった。高校時代のクラスメイト・高松正志、その婚約者・大原冴子さん、そして、思いがけないことに、彼らが在学当時美術部の顧問をしていた山本政義先生も同道してくれていた。

一瞥以来の挨拶が済むと早速彼らは作品の前に立った。もちろん、色覚障害については話していない。

「……うーん、いいねー。これ上高地だろ？ 梓川の流れる音が聞えてきそうだ。それに、森林の深さが何ともいえないね。春まだ浅い、生まれたばかりの若葉の息吹が感じられるよ……。ただ教師として敢えて一つ批評してみたことを言うとな、二階堂君、きみはかなり欲が深いね。一枚の絵の中に、穂高の迫力、新緑の美しさ、梓川の清らかさ、こんなにいくつも盛り合わせたら、却って総ての印象が弱くなるよ」

と、山本先生。

「私は、この絵の前で思わず深呼吸したわ。新居に欲しいわね」

「あ、これはちょっと困るんですが、今度別の作品を描いたら結婚祝に差し上げましょうか」

「いえ、いいんですのよ。高松さんに買って頂きますから。ね、あなたお願い」

「えーっ、ちょっと待てよ、そんなこと急に言うなよ」

「でも、本当に落ち着いた素敵な絵ですね。いつまでも見ていたいわ」

「きみは美術部には入っていないかったよな。卒業してからどこかで習ったのか？」

「いや、本当は高校三年の終わり頃から少しずつ始めていたんだ。もともと束縛されることがあまり好きじゃないから、全くの独学なんだよ」

「へーっ、こんなうまい奴がうちの部にいてくれたら、都立校美術大会なんかでも少しは大きな顔が出来ただけだな。それはそうと、繊細で、重厚で、絵そのものに存在感があつてスゴイ。素晴らしいと思うよ。春を待ちかねていた小鳥たちのさえずりが聞えてきそうな気がするね。でも、電話では自信が持てないと言っていたけど、冗談だろ？」

「……実はね……」

ここで彼は、苦悩の表情を浮かべ、自分の障害について正直に話した。

「……そうか、自分の眼でわかるように木々を描く、もちろん本当に判ってはいないと思うんだが、その分感覚を研ぎ澄まして描くそれが、見るものにとっては、神秘的なまでの深さ、重厚さに繋がっているんだらうな。……長かった私の教員生活の中でも、君ほどの色覚障害を持っていながら絵に打ち込んでいた教え子はいなかった。それに、不勉強で色覚異常については一般的な知識しか持ち合わせていないが……、赤、緑、茶と言えば、風景なんかは殆んどこの三色で構成されていると思う……君はこの絵を描いたことで何かを掴んだようだね。自信を持って描いていつて欲しいね。若葉は若葉として、新緑は生命の躍動が感じられるように表現されている。かえって、穂高の荘厳なまでの厳しさなんかは、我々正常な色覚を

持った者ではここまで描けないと思うね。私達では想像も出来ない苦勞と努力があっただらうねー。……どうだね、高松君」

山本先生は、言葉を選ぶように重い口調で話した。

「……そうですね、この絵にそんな秘密と言うか、苦勞があつたとは想像も出来ませんでした。……僕もたまには絵筆を握るんですが、恥ずかしくなりますね。二階堂君に較べれば大人と子供のような感じを受けます。確かに自分自身の目で確認できない悔しさ、恐さはあると思うけど、もうあまりその事を意識しなくてもいいんじゃないかな。君は充分そのハンディを超越したと思うよ」

「……私は、大変なショックを受けています。色覚について意識したり、考えたことなんてなかったし……。そのことで苦しんでいる人が存在するってことも初めて知ったわ。私達にとって、ごく当たり前の事が、そうじゃない人もいると思うと、あらためて自分の幸運に感謝しなくては、って思います」

「……この絵は、本当に自分があの時感じたように表現できているのかどうしても判らなくて。……どんなに眼を凝らして見詰めても、眺めても、木々の緑の感覚や梓川の流れなどどれも、見れば見るほど判らなくなってしまつて……。一度は切り裂いて捨ててしまおうとした事がありました。でも、よかった、捨てなくてよかった、いま本当にそう思っています」

途切れ途切れに、苦しそうに昌幸は言った。

「……そんなに……」

「……」

「……苦しかっただらうね。……私には想像することも出来ないが。しかし、よかった。見せて貰つてよかった、と私は思っている。こんなに素晴らしい作品が、ずたずたに切り裂かれなくて本当によかった。この作品は、君にとって大事な一里塚だらうし、大きな記念碑にもなるうかという作品だよ」

「……ありがとうございます。あの時、穂高を前にして感じた衝動をそのままぶつけてよかったと思っています。今の言葉をお聞き

して、少し自信らしきものも持てたような気がします。こうして、上高地を描いたことで、モチーフも随分拡がりますし、いままで意識的に避けてきた自然の美しさに真正面から立ち向かう勇気が湧いてきたように思います」

昌幸は、どうすることも出来ない無力感の中から、次第にそのハインディを克服する方法を身につけていった。と言うより、むしろハインディとうまく付き合う術を見つけたと言ったほうが正しいのかもしれない。

清涼感、静寂感に溢れ、繊細な彼の絵画は、作品を見た友人知人たちの心を打つようになり、個展の開催を望む声も耳に届くようになってきた。

二十年以上の歳月が流れ、その間には個展を何度か開催した。その度に受ける評価も高くなっていった。いつしか、絵画は彼にとって、ただの趣味ではなく、人生そのものと思えるようになっていた。しかし、個展も十回目を迎えた頃から彼は、どこか物足りなさ、焦燥感のようなものを覚えるようになってきた。何か違う、どこか違う、自分の求めてきた絵画の世界とはこんなものだったのだろうか、と、心の奥底で納得できない戸惑いを感じるようになってきた。また一つの転換点に差し掛かったようである。

彼は大きな壁を前に、ただひたすら考えた。出口はなかなか見つけられなかった。そんなある日、気分転換にハイキングに出かけた。何かに導かれるようにふと立ち寄った山里の古い寺で座禅をする機会を得た。何気なく参加した心の中に、何かを掴めそうな、何かが見えそうな、不思議な予感が芽生えた。

背筋を伸ばす。組んだ脚が痛い。無心にならなければと強く意識すればするほど様々な雑念が脳裏に湧き上がってくる。次第に背筋が崩れてくる。警戒がなる。週に一度の参禅も、三ヶ月ほど経つとあまり背筋に意識を集中させなくても自然に姿勢が落ち着くように

なってきた。その頃になつて、雑念を振り払うのではなく、一つの想念に意識を集中させることに気がつく。

彼はまるで何かに取り付かれたように見えない出口を求め、自身自身の心の内と対峙していた。

半年ほどが経過した頃、ゆつたりとした姿勢を保ち、ひたすら禅を組む彼の姿からは、始めた頃の悲愴感をも感じさせる突き詰めたような硬さが取り払われ、自分自身の心と対話することの楽しさを見出した余裕と、何ものにも支配されない時間を愉しむ姿が窺われるようになっていた。

やがて一年が過ぎ去ろうとしていたある日、漫然と禅を組む彼の心の中に変化が訪れた。超越したような想念に浸っていた意識そのものが徐々に透かされて、何も浮かばない、考えない、思わない、全くの空の状態に到達した。無我の境地との出会いである。

座禅を通して身につけた「無」の世界に身を置くことで、彼のこれまでの絵画に対する意識が微妙に変化していった。

ハンディに、美しさに、繊細さに拘り過ぎていなかったか、自分が描く自分の絵、自分の世界、そんなものに余りにも囚われ過ぎていた。これからは、絵画の中で遊んでみよう、肩の力を抜いて、湧き上がってくる衝動だけに身を委ね、素直に表現してみよう。幻想や瞑想の世界に自由に筆を遊ばせてみよう。彼はようやく、自分が描くのではなく、自然に描くことに気がついたようであった。

湧き上がってくる創作衝動に身を任せ、モチーフも、技法も、時にはあれほど拘っていた色彩さえも意識から消し去って、彼は描く楽しさを改めて身に付けていった。

いつしか麗華の歌声は、テレビ、ラジオから殆んど聞かれることはなくなっていた。しかし、昌幸の心の奥にはいつも彼女の清らかな歌声が流れ、本棚に置かれた『大辞林』を通して優しい笑顔が浮かんでいた。

愉しんで描いた作品は観る人の心にも伝わるようで、友人達の間から個展を待ち望む声が聞かれるようになった。

「絵が変わりましたね」

「何か重大な変化があったのですか？」

「じつと何時間でも見ていたい絵ですね」

一枚の絵の前で佇む人、小さい声で何か口ずさむ人、筆記具を取り出して構図を写し取る人まで現れた。気がついてみれば、前回の個展から三年の歳月が経っていた。

「少しお話しをお聞きしたいのですが」

若い男が大東新聞社文化部の名刺を差し出して昌幸に言った。会期も終わりに近付いた五日目の午後のことであった。

ひととおり作品を観て廻ると、創作の意図や画歴などの取材をした後、これは、取材とは関係ないのですがと断り、言葉を切り出した。

「私は昨年まで二年ほど外報部員としてイギリスに駐在していたのですが、その経験で言いますと、先生の作品は海外ではもっと高く評価されるのではないのでしょうか。ご協力させていただきますので、自信作を一点、英欧美術館に贈ってみませんか？ あちらで興味を持たれば、色んな展開が期待できるかもしれません。……：そう言えば、十年程前、今では日本画の大家と言われている大河原真先生が世に出る切っ掛けとなったロンドンでの個展も確か同じようなことが始まりだったと言われていますね」

彼はその申し出を有り難く受けることにした。作品は、新聞社の社内便で送ってくれると言う願ってもない話であった。

大きな反響を得た個展は無事終了した。仕事をし終えた虚脱感の中で、彼は、

「これらの絵は自分が描いたのではない、何か大きな力が描かせてくれたんだ」

と、あらためて感じていた。

世の中は、バブル崩壊の余波で大不況の真っ只中にあつた。彼の勤める会社も例外ではなく、業務縮小と人員削減に苦慮していた。彼は、作品に対した時の燃え上がるような情熱や自信とは対照的に、会社や仕事に対して持っていた希望や意欲はどんどん衰退していった。

「どうせ苦勞するなら、絵の方で苦勞したい」

と、仕事を辞めることを決意した。もちろん、独身の気軽さはあつたのかもしれない。ただ、

「会社の仕事は誰にでも出来る。しかし、こんな絵は、自分にか描けない」

そんな思いも大きく影響していた。昌幸、四十六歳の時のことであつた。

4、再会

帝都百貨店美術画廊での個展開催が決まつたのはそれから半年ほど後のことであつた。

彼は、何ものかの意思のままに、思い浮かぶものを、思い浮かぶように描いていく。そんな創作活動を続け、充実した日々を過ごしていた。

個展がひと月先に迫ってきたある日、彼の心は、急に湧きあがってきた甘酸っぱいような感情に戸惑っていた。

「いまの自分の作品を麗華に見せたい。どうしても見て貰いたい」
今まで持ったことのない不思議な心の動きであつた。麗華との思ひ出は、最も大切なものとして、そつと仕舞っておくと決めていた筈であつた。

麗華にしてみれば、自分はただの幼馴染の一人と言うだけの存在なのかもしれない。それに、最近でこそテレビに登場する機会は少

ないが、その歌声と共に好感度の高い芸能人である。家庭を最も大切にしていると聞いたこともある。

迷惑だろうか、自分のことなど記憶の片隅にもないだろうと、考えれば考えるほど強く彼女に拘っている自分に気付く。迷いは大きく、悩みは深い。

「ごだわりは、絵に対する気持ちと同じように捨てよう。もし、自分のことを忘れ去っていたらそれまでのことだ」

一週間迷った末、彼は実家に電話をした。

「母さん、悪いけど、秋月さんのお宅に行つて麗華さんの電話番号号聞いて来てくれない？」

母は、彼女の母親とは友人であつた。それに、お互い家もすぐ近くである。

待つほどもなく、電話番号は伝えられた。

手にしたメモを眺めていても、なかなかダイヤルできない。また迷う気持ちが頭を持ち上げてくる。ただの昔の友達、忘れられていて当たり前、と自分に言い聞かせながら、チラツと本棚の『大辞林』に眼を走らせ、勇気を奮い立たせてダイヤルする。電話番号を知つてから五日間が過ぎていた。指先が震える。コールが「やめろ、やめろ」と鳴っているように聞こえる。心臓の鼓動が激しい。目眩がしそうだ。やっぱりやめようと受話器を戻そうとした時、

「もしもし、」

三十年ぶりに聞く声であつた。変わつていなかった。一瞬で顔や姿が浮かんで来た。

「あ、あの、突然電話なんかしてすみません。今度、帝都百貨店で油絵の個展を開きます。それで、もし時間の都合がいたら見に来て頂けないかなと思つて」

高まる胸を抑えてこれだけ言うのがやっとであつた。

「いつから？ そう、見たいな。行くわ。絶対見に行きます」
ぎこちなくどきまぎした彼に、くすつと小さく笑うと言つた。

「あら、あなたと初めてお話しした時みたい。あなた、あの時凄

く緊張してた。全然変わってないのね。何だか嬉しいわ。あなたが絵描きさんになったって実家に行く度に母から聞いていたのよ。高校三年生の頃から絵を描いてるんだって？」

「うん、もう三十年近くになるよ」

「へーっ、凄いわね。ずっと続けてるんだ。ところであなた元気だった？ え、わたし？ わたしは元気よ。じゃ住所言っから案内状送ってね」

麗華の方は冷静であった。

不思議な話である。三十年間音信のなかった二人が、つい昨日別れたように親しげに会話していた。気がついてみれば、名前を聞かなくてもお互い相手が判っていたのである。

受話器を置いた昌幸の手の平はじっとり汗ばんでいた。

個展が始まった。会期は六日間である。

「この個展はお客さんは誰も来なくてもかまわない。麗華一人さえ来てくれれば」と、昌幸は思っていた。しかし、最終日になっても彼女は現れない。あと一時間ほどで会期は終了する。彼は、二週間後に依頼されている講演の原稿でも書こうと画廊の隅でレポート用紙に向かった時、入口の方から声が聞えた。なつかしい、ずっと待ちわびていた声であった。

「間に合った、よかったわ。エスカレーター駆け上がってきたのよ。元気そうね。少し痩せた？」

息を弾ませながら麗華は、矢継ぎ早に言った。その言葉を聞いた瞬間、三十年の時間が消えた。彼女は、あの頃のまま、そこにいた。むしろ、あの頃にも増して美しくなって、あたたかなオーラを纏って、そこにいた。

「案内状が届かなかったから、あなたの実家まで戴きに伺ったのよ。お父様もお母様も随分久しぶりにお会いしたけど、お元気そうだった。嬉しかったわ。あなた、凄いわね、こんな立派な所で個展開くなんて。わたしたちが逢わなくなっただ頃からずーっと続けてる

の？」

「うん、きみに歌があるように、僕には幸い絵があったから。もちろん、メジャーのきみと、まだまだマイナーの僕を同じように言うのは失礼だけど」

「何言ってるのよ、たまたま幸運の女神がわたしの方を先に見てくれただけじゃない。あなたの絵はこれからよ」

「ありがとう。来てくれただけで本当に感謝している」

「それより、ゆっくり見せてよ」

「何年か前までは、確かに自分で描いているという実感みたいなものがあつた。だから、それぞれの作品について、描いた時の気持ちとか思いを説明できたんだ。でも、最近の作品って、自分で描いたと言うより、何ものかに描かせてもらったとか思えなくなってしまうって、自分でもうまく説明できなくて困っているんだ」

麗華と話している時の昌幸の言葉は、どうしてもどこかきこえない「……一時間じゃとても無理ね。わたし、こういう絵つていままで見ることないわ。確かに目で見るのだけれど、心で見るのね。何か響いてくるものがある」

「ありがとう」

「あなたの言ってた、自分が描いたんじゃない、何かに描かせて貰ったってこと、なんとなく解るような気がするわ」

「きみが初めてテレビに出た時、飛び上がるほど驚いた。でも、きみはこういう音楽を通して人にやすらぎや希望を与えるために生まれた人だったと理解できて、本当にうれしかった。もちろん、手の届かない世界に行ってしまったという淋しさはあつたけど」

「そんなことない。あなたと同じ世界にいるわよ。ちゃんとお電話でだってお話してきたし、こうして一緒にギャラリーにいるじゃない。それに、デビューしたあの時も、テレビを通してだったけれど、わたし、確かに驚いているあなたとお話したわよ」

「うん、いまでも不思議に思っているんだけど、脳の奥の方で、きみの声を聞いたような気がする」

ギャラリーには、七、八人の観客がいたはずであったが、三十年ぶりに再会した二人の周りには、いま、誰もいなかった。誰の気配も感じることは出来なかった。昌幸の絵画の持つ幻想的な雰囲気の中に、麗華の神秘的とも言えるほどのオーラが溶け込んで、大舞台に立つ二人をスポットライトが包み込むような、何もかも寄せ付けない空間を創り出していた。

気がついてみれば、あつという間の一時間であった。

「ごめん、写真撮っていい？」

「いいわよ。そう言えば、あの頃わたし達写真も撮らなかつたわね」

返事を聞くと、彼は画廊の係員にカメラを差し出した。

「お願いします。シャッターを切ってください」

係りの女性は、固まっていた。

「は、はい」

と応えても指先が動かない。

「落ち着いて。ゆっくり押してください。ピントは自動的に合いますから」

言い聞かせて彼は麗華の横に立った。肩にそつと手を回したい、腕を組みたい等と考えながら何も出来ず、結局平凡に横に並んだ。

画廊の外が騒がしかった。彼女は、その顔や歌声を知らない人は殆んどいない有名人なんだ。彼には急に彼女が遠い存在になった気がした。しかし、彼女が有名な歌手でなくても美しさに見とれる人振り返る人は多い。それほど彼女は輝いていた。

「これ、バレンタインチョコレート。食べて」

爽やかな、そして温かな風を残して麗華は帰って行った。

「しまった。電話なんかするんじゃないかった。逢うんじゃないかった」

彼の実感であった。また忘れられなくて、辛い日々が始まる予感があった。

彼のそれからの毎日は、筆を握っても、講演の原稿作りにパソコンの前に座っても、何も出来ない、何も手に付かないという思考も纏まらず、落ち着かない日々であった。

「どうにもなるものじゃない」

と、頭を叩いてみる。しかし浮かんでくるのは彼女のことばかりであった。

十日ほど経ち、やっと少し落ち着きを取り戻した頃、電話がなかった。

「今日実家に行こうと思ってるんだけど、少し逢える？」

それは思ってもいなかったことに、麗華からであった。

「いいよ、どこで待ち合わせる？」

「車で行くから、北千住駅の前で待ってて」

時間を打ち合わせると、昌幸は大急ぎで身支度を整え駅前に向かった。約束の時間より二十分も早く着いてしまったが既に麗華は爽やかな笑顔で待っていた。

「何処に行こうか。ゆっくりお話しできるところ知らない？」

彼女は何処に行っても人目を引いてしまう。

「あれ？ 実家に行くのじゃなかったの？」

「いいの。あれは自分に対する口実よ」

彼女は悪戯っぽく笑った。

「……今日って火曜日よね。……弁護士やってるお友達が毎週この日は自宅で仕事してるって言ってたから、そこでいい？ ちよつと電話してみるわ」

「もしもし涼子？ わたし。今から行っていい？ そう。近くに
いるからすぐ行くわ」

短い通話で了解は取れたようである。車はしばらく走って、大きなマンションの地下駐車場に滑り込んだ。

「ごめん。何も言わずにしばらくお部屋を貸して」

「何よ急に。誰？ その人」

「とにかくごめんなさい。この人古いお友達なの。絵描きさんよ」
「判ったわかった。その奥の応接室でいい？ コーヒーなんかは勝手にやって。私は仕事してるから」

いぶかしげな表情を浮かべたまま、涼子は言った。

部屋に入った二人は、お互いの顔を見詰めあったまま、しばらく言葉を発することが出来なかった。いつも明るい笑顔を浮かべている麗華の表情も硬い。五分、十分と無言の時間が経過する。

「……ごめんなさい、呼び出して。わたし、苦しうって、あなたに逢いたくて苦しうって……」

言葉と共に麗華は突然昌幸の胸に飛び込んできた。想像も出来ない行動であった。うろたえながら彼はしっかりと抱きとめた。

「……僕もこの十日間、絵も描けないし、何も手に付かなくて……」

「……わたし、あなたのことはかり考えてて、ポーツとして歌詞を間違えたり、お料理していても包丁で指を切ったり、自分がどうかなってしまっただって思うほど変だったわ」

「僕も辛くて……。個展の電話なんかするんじゃなかった、あのままずつと逢わない方がよかったですと後悔していた」

「わたしも迷ったわ。でも、行かなくてはいらなかった。行ってよかったですって思ってる」

「本当に来てくれるか半信半疑だったし、最終日には、やっぱり時間が取れないんだろうと思っていたから、来てくれて、なんと行って表現したらいいのか解らないくらい嬉しかった」

「わたしは、帰りの車の中で、どうして三十年前のあの時、わたし達離れていったんだろうって考えてた。でもよく解らなかった。お互い幼かったのね」

「それもあつたと思うけど、あのまま付き合っていたら、もつと違った生き方が出来たような気もするし……。歯車がきちんと噛み合っていないかつたんだろうか……。きみに嫌われて、結局苦しい思

い出になってしまったかもしれないし……」

「……苦しい思い出だなんて、そんなことはないわ。絶対にないわよ」

「いいよ、もうそのことは。またこうして出会えたんだから」

昌幸は抱きしめた手にほんの少し力を込めた。しばらく静かな時が流れる。お互いの脳裏を様々な思いが去来する。

昌幸の心の中では、麗華が自分に対して持っていた気持ちを初めて知った驚きと戸惑いの感情が渦巻いている。

「……でも、どうしようか、これから先。……こうして時々逢ってお互いの愛を育んでいけば、苦しくなっていくばかりだと思う……。僕は三十年前からずっときみのこと大好きだ。世界中で一番大切な人だと思っ生きてきたんだ。これは神に誓って言える。きみも僕のこと好きでいてくれるみたいだから、逢えば逢うほど辛くなってくるような気がする」

「……」

「僕は、少しずつきみが離れていった時に思ったんだ。小学校は転校生でイヤなことや辛いことばかりだった。中学校も少しもいい思い出がなかった。こんな僕に神様が同情して、ほんのちよつと気紛れに夢を見させてくれたんだ。だから、きみとの一年間の夢のよくな日々の思い出を大切に、これから先を生きていこうと……。そう自分に言い聞かせることでやっときみのことを諦められた」

「わたしは、あなたと少しずつ逢えなくなっていた頃、急に周りにお友達がいっぱい出来て、淋しい思いはしたけどそんなに落ち込まなかった。大学に進んだ頃から忙しくなつた。でも、心のどこかで、大きくなつたり小さくなつたりしながら、いつもあなたの存在があつたわ」

また短い静寂の時間が二人を支配していた。

「……でも、辛くなるからって、これで終わりなんて絶対いやよ。耐えられないわ」

「……………」
時計の針が秒を刻む音だけが妙に大きく聞えていた。

「……………」わたし、いまの総てを捨ててもこれから先はあなたと一緒に生きて行きたい。……………三十年経って、あなたがわたしに連絡する気持ちになつたつてことも、わたしが、どうしてもあなたに逢いに行きたくなつたつてことも、やっぱり運命付けられていたような気がするの」

麗華は決意を込めた表情を浮かべると、静かに言った。

「……………」僕は一人だからいいけど、きみは、ご主人や子供さんを説得できるの？」

「……………」ええ、……………大丈夫よ。主人は心が大きくて強い人だし、……………二人の子供は皆それぞれ自分の生き方を見つけたようだから、母親の出番はもうなさそうだって思う。それに、どれだけ時間が掛かっても、きちんと理解してくれるように一生懸命説得してみるわ」

「……………」わたしも四十八歳になつたいま、あとどれぐらい生きられるかわからないし、これからのわたしは、あなたと一緒に生きて行きたい」
その時、突然部屋の扉が開いた。

「ちよつと、何言つてんの。自分たちが何をしようとしているのか判つてるの？」

「……………」
「……………」

「……………」ごめん。気になつたから少し立ち聞きしちゃつた。でもね、何の問題もない平和な家庭を飛び出していこうなんて、大変なことなのよ。麗華、よく判つてるの？ それに、あんたたちそんな大変なことをしてまで一緒になろうとするほど、お互いのことよく理解してるの？」

「わたしは、三十年前からこの人のこと好きだつたし、将来結婚するならこういう人がいいな、きつとこういう人だろつなつて思つていたわ。そりゃ、ちよつとした神様の意地悪あの時は別れてし

まっただけれど。だから今度こそもう同じ失敗はしたくないのよ。この人のこと理解しているかどうかなんて、そんな次元の話しじゃないって思う」

「僕も、この歳になるまで結婚しなかったのは、どんなに素敵な人が周りに現れても、どうしてもこの人と比較してしまう、いけないことだと判っていても、やっぱり較べている。この人以上の、この人を忘れることが出来る人なんかいるわけではないと頭では理解していても、やっぱり感情的にはどうすることも出来なかった。それで、三十歳を越えた頃から、僕はきつと精神的にはこの人と結婚しているんだと思ってきました。だから、いま麗華さんが言ったように、お互いを理解しているかどうかなんてことじゃないんです」

「わたしも高沢と結婚して二十年以上経って、子供も二人いるし、大変なことって言うのは判っているわ。主人も子供たちも愛してるし、でも、そんな次元のことじゃないって、なにか大きな力が訴えかけてくるのよ。涼子、お願い、解って」

「うーん……。私も職業柄いろんなケースを扱ったけど、本当に大変なことなのよ。せめて、半年間くらい様子を見て結論を出しなさいな。それこそ、三十年も待ったんだったら半年や一年なんて、どうってことないじゃない」

「……、そうですね。今の気持ち絶対変わりませんが、結論は少し先に延ばした方がいいかもしれませぬね。半年間逢えないわけじゃないのですから」

「……、そうですね、そのかわり毎日でも逢いましょうか」
「でも、きみの場合、あまり頻繁に逢うと週刊誌や芸能レポーターがうるさくなってくるよ。一週間に一度くらいにした方がいいだろうね。ステージの仕事だって一年先くらいまで予定されているだろうし」

「レポーターなんかに見付かったら全部話してしまおうかな。案外それが切っ掛けで踏ん切りがついたりして」
笑みを見せながら麗華は小さく舌を出した。

「半年経って、お互い今の気持ちのままでしたら、もう、私は何も言わない。黙って協力するわ」

「ありがとうございます。僕たちは二度と逢うべきではなかったのかも知れません。もちろん、逢いたいと思って電話したのですが、この人が僕と同じような気持ちでいたとは想像もしていなかったんです。でも、今はやはり逢ってよかったと思っています。何と云ってもいままでの年月を無駄にしないためにも、お互いを大切に生きて行きたいと思っています」

「あなたの生き方にわたしの存在がそんなに影響を与えていたなんて考えてもいなかったわ。ずーっと面影を大事にしてきたのはわたしだけだと思っていたのよ。だから、今日逢って本当に嬉しかった。これからは、もっと自分の気持ちに素直になるわ」

「わかった、わかった。でも、二人とも五十歳間近って言うのによくそんな情熱があるね。驚きだね。まあ、芸術家のエネルギーって情熱だっけ言うからね。二人とも、繊細で、情熱的で、やっぱり芸術家なんだね」

涼子は大げさな素振りです息をついた。

「ただ、二人によく言っておきたいんだけど、きちんとした形が整うまで、家庭の中で波風を立てないでよ。相当難しいケースになると思うけど、出来るだけの援助はするから。それと、これからは毎日でも逢いたくなるでしょ、このカギ渡しておくから、私がいてもいなくても自由にこの部屋使っていていいよ。それと……、ま、いいか、二人ともどうしようもなく愛し合っているみたいだから、これ以上何も言わない」

涼子の顔を見詰める麗華の眼に光るものが浮かんでいた。

「来週辺り、もちろん日帰りだけど、取材で鎌倉に行こうと思っているんだ。よかつたら一緒に行く？」

麗華の顔がパツと明るくなった。

「行くわ。行く、行く。火曜日はコンサートの予定が入っている

から、それ以外の日にしてね。家の方は、お友達と気晴らしに温泉にでも行くって出てくるわ」

「それなら水曜日でしょうか。電車で行くつもりだったけど、きみと一緒に人目についてしまうし……」

「いいわ、この車で。わたし運転して行くわ。こつ見えても運転うまいのよ」

涼子の家から帰る途中で早くも次の楽しい予定が決まってしまった。お互い、今日から指折り数えてその日が来るのを待つことになるだろう。まるで遠足を愉しみにしている小学生のように。まさか、照る照る坊主を作ったり、お菓子を買って来たりはしないだろうが。

5、鎌倉にて

三月上旬の水曜日。晴れ渡った空の下、麗華の運転する車は、快調に高速道路を走っていた。

車内に会話はない。お互い言葉は必要としない気持ちになっていた。時折見交わす眼と眼で存在を確認するような雰囲気があった。今日の麗華は、地味な服装を心掛けたようである。化粧も殆んどしていない。うすくルージュをひいているぐらいだろうか。しかし、その存在感やオーラは消しようがない。

市営駐車場に車を置いた二人は、手を繋いで町並みを歩いた。三十年前には、手を触れ合ったこともない彼らが、ごく自然に手を繋いでいた。事前に予定していた取材コースを歩く姿は、年齢を全く感じさせないほど若々しく、軽やかに、そして、周りの風景に溶け込んでいた。

昌幸は、所々で足を停めて鉛筆を走らせる。覗き込む麗華の表情は、生き生きとして楽しそうだ。同じようなアングルで何枚か写真を撮ると、衣服をはたいて立ち上がった。

本来彼は克明に描写するが、彼女を退屈させないようにと思いつて手法を変えた。全体の構図だけを紙面に写し取り、細部は印象

と想像を大切にし、あとは写真を参考に使うことでスケッチにかか
る時間を短縮することにしたのである。

「いいのよ、もつと時間を掛けても。わたし、あなたが描いてい
るのを見てるだけで楽しいから。気を遣わないで」

「いいよ。こういう風景はその場の雰囲気や空気だけ感じられ
ば、あとは、ちゃんとキャンバスの上に表現できるから。それより
頼みがあるんだけど、いいかなー」

「なーに」

「小さな声でも、ハミングでもいいけど、きみの歌声を直に聞き
ながら描いてみたいと思うんだ。僕の絵が変わりそうな気がする」

「いいわよ」

軽く頷くと彼女は、抑えた声量で歌い始めた。それは、デビュー
したばかりの頃と殆んど変わっていない。しっとりとして艶やかで、
町の風情に見事に溶け込んだ素晴らしい声であった。鉛筆を持った
彼の指先がリズムに乗ってなめらかに滑っていた。続けて二曲を歌
い終わる頃、彼も一枚のスケッチを終えた。

「やっぱりきみって凄いよ。これ、きみの歌声が僕の手を使って
描かせたんだ。自分では全く力を入れていないし、何も考えていな
かったんだよ。ただきみの歌声に聞き惚れていただけなんだ」

「よしてよ。あなたの好きな曲はきつとこれかなって思ってた唄っ
ていただけなんだもの」

「……」

確かにこの時昌幸は、麗華の歌声に感動していた。そして、その
歌声の持つ秘められた大きなパワーの凄さに酔ってもいた。

「お昼ご飯どうしようか」

「ホテル鎌倉のレストランに行こうか」

「あのホテルの雰囲気大好き。あなたの絵みたいに重厚で、優雅
で、接客も洗礼されてるし、何よりお料理がおいしいのよ」

「前に来たことあるの？」

「二十年くらい前のことよ。従業員さんたちも替わってしまっているから、きつとわたしのことが付かないわ。大丈夫よ、さあ、行きましょ」

言つと彼女は、彼の腕を抱え込んだ。

「あ、ほらあなた、リスがいるわ。あ、あそこにも。わー、たくさんいるのね。そう言えば、あなた、リスとか犬、猫なんかの絵つて描かないの？」

「犬でも猫でも、依頼があれば何でも描きますよ。でも、奈良公園なんかにいる鹿だけは、ちよつとね」

「へーっ、どうして？」

「鹿つて、ほら、知ってるかなー、ずっと前、吉永小百合さんが唄った『鹿のフン』つていう歌があつたんだよね。あれを聞いて以来、どうも連想がよくなくて描く気にならないんだ」

「くくくっ、いやーねーっ。でもよかつたわ、わたしの歌じゃなくつて」

軽い会話のうちに「ホテル鎌倉」に着いた。別館のレストランに席を取る。

「わたしは、サンドイッチにしようかな。それと、オレンジジュースを。あなたは？」

「僕も同じものを」

注文を受けたウェイトレスの表情がこころなし上気していた。復唱する声も少し上ずっていた。

広いフロアにゆつたりと間隔を取つてテーブルを配置してあるこのレストランは、周りの席があまり気にならない。少し離れた席に四、五人の婦人たちがいた。彼らが席につく頃から気が付いたらしく、時折遠慮がちに視線を向けてなにやら話し合っている。しばらくすると、我慢できなくなつたのか、席を立ち近付いてきた。

「すみません。サインして頂けませんか」

「一緒にお写真撮つていいですか」

何のことはない、入つて来た時から彼女の身元は知られていたよ

うだ。無理もない、彼女のオーラは消しようもなく、このフロア全体がふつと明るくなつたように感じるほどだったのである。

「申し訳ございません。当レストランの支配人でございますが、別に個室をご用意いたしましょうか？」

「ありがとうございます。少し騒がしくてご迷惑をお掛けしますが、こちらさえよろしければ私達はこのままで結構です」

「このレストランをご利用になられる方々は比較的洗練されておいですので、すぐに落ち着かれると思います。どうかごゆっくりなさってください」

一礼をして支配人は下がっていった。

「いやだわ。判らないって思っていたからあなたと腕を組んで入ってきたのに、見られてしまったわ」

「いいよ、一年も経てば本物の夫婦になれるんだから」

「本当ね。夢みたいな気がするわ」

うつとりとした麗華の瞳は、気のせいか少し濡れているように見えた。

二人は三十年の空白を埋めるように、高校生同士のあの頃に戻つたような気持ちで、週に一度の貴重な時間を、映画や展覧会を見たり、食事をしたり、小さな旅をしたりしながら、充実した楽しい時間を過ごした。

やがて、涼子との約束の半年が過ぎようとしていた。

6、新たな旅立ち

どんな話し合いが持たれたのか、また、どのような条件が出されたのか、昌幸は知らなかった。ただ、麗華の心の底からの懇願と、涼子の真摯な説得が解決に大きく影響したことだけは確かだと思われた。そして、二ヶ月ほどの月日で麗華の離婚はこのほかすつきりと成立した。

「いままでの財産上の権利は総て放棄します。いまでもあなたや子供たちを愛しています。でも、それ以上に彼との生活を大切にしたいと願っています。判つて欲しいとは思いませんが、わたしのこの我が儘を許して欲しいんです」

心を込めた、こんな麗華の訴えが、夫に「仕方がない」と思わせたらしい。

「私と君の縁は切れてしまつが、子供達との縁は切れなと思う。今後も何かあつたら相談にのつてやつて欲しい」

そんな言葉があつて離婚届に署名捺印されたら昌幸は涼子に聞かされた。

「申し訳ありません。色々ご迷惑をお掛けしました」

後日、昌幸は涼子と共に麗華の前夫・高沢雅史氏にここから詫びる機会を得た。

「二十年以上麗華と一緒に生活できたことが本当に幸せでした。正直に言つて、二階堂さんの存在に、今になつて考えれば思い当たることもあります。ふと、彼女が遠い目付きをしていたり、話し掛けても思わぬ返事が返つてきたり、一生懸命テレパシーで誰かと交信しているのかと思えるような場面を見たり、それほどあなたの存在が大きかつたんでしょね。そんな相手と戦つても勝てる訳はないですし、なにより、彼女自身の心があなたにある以上、潔く、いままでありがとうと言つてやらなくてはという気持ちになりました。これからは、彼女のことよろしく願います。幸せにしてやつてください」

昌幸は、ただ頭を下げ頷くだけであつた。

こうして、大きな問題のこれ以上はないほどの解決をみて、昌幸も、立ち会つた涼子も、改めて麗華の人間性に深い感銘を受けた。

彼らは、年齢から来る照れもあるのであろうか、いきなり一緒に生活しようとはしなかった。法律上の待婚期間、六ヶ月に拘る気持ちがあつたわけでもない。そんなことは問題にもならないほど愛し

合っていたのであろう。

地方での一週間のコンサートを終えた麗華は、真つ先に昌幸の自宅兼アトリエを訪れた。

「ただいま、あなたありがとう。見に来て下さったのね。ちゃんと判っていたわ。自分では最後のコンサートにするって決めていたから、あなたの姿を見付けて本当に嬉しかったわ」

「ごめん。きみが緊張すると思ってこっそり行ったんだけど、判っていたの？ じゃー楽屋に花束でも持っていけばよかった。……素晴らしかったよ。きみの歌に対する情熱と、持って生まれた透き通った声、歌唱力、心が震えた。どの曲も聞いていて魂を包み込むようで、温かく優しく、やっぱりきみは選ばれた人なんだと感じた。大勢の待ってくれている人達がいるんだから、なにもこれで引退するなんて決めてしまわなくても、機会があつたらまたステージに立つたらいと思うよ」

「……そうね、もう一度しっかり考えてみる」

「あ、そうそう、エメールが来ていたんだけど、一緒に読もうと思って待っていたんだ。もっとも、本音を言うと言語の手紙なんて訳が判らないから、きみに訳してもらおうと思っていたんだけどね」

くすつと小さく笑うと麗華は、一通り目を通した。

それは、英欧美術館からであった。

「じゃ読むわね。あなたの幻想的で、しかも繊細な作品に、当館員一同大変感動し、ぜひ、出来る限り早い機会に当方にて個展を開催していただきたく存じます。条件等は在日大使館と打ち合わせの上、よろしくご手配願いたい。ですって。え、なにこれ」

英語に堪能な麗華の弾むような声を聞きながら、昌幸は何度も頬を抓っていた。

「……じつはね……」

昌幸は、大東新聞社の薦めで、作品を一点英欧美術館に贈ったこ

との経緯を細かく話した。

「……でも、本当にこれほどの評価を受けるとは信じられない……」
「……」
「凄じじゃない。よかつたわね。あなたの絵はきつとヨーロッパの人たちに注目されるって思ってたわ。もちろんわたしも一緒に行くわ。だつて、あなた英語は全然ダメなんですよ」

「こんな形の招待なんだから通訳ぐらいは手配してくれると思うよ。でも、きみと一緒にロンドンブリッジやいろんなところを歩いてみたい。楽しいだろうな。人の眼を気にしなくてもいいし、テムズ河畔を腕を組んで歩こうか。シャーロック・ホームズの家にも行ってみたいな」

「それって、小説のお話なのよね。でも面白いわね、ちゃんと家があるなんて」

既に二人の心は遠くロンドンに飛んでいた。

大使館との打ち合わせ、渡航の準備、個展に出品する作品の準備と、描くこと以外に殆んど関心のない昌幸にとって、最も苦手なこれらの準備や手配も、旅慣れた麗華のお蔭で手際よく整えられていった。

英欧美術館からのエアメールが届いておよそ三ヶ月が過ぎた。

二人の姿が、新東京国際空港にあった。

荷物の殆んどは大使館の手配で既に運ばれており、およそ一ヶ月と予定されている海外旅行とは思えないほど身軽な二人の様子は、高所恐怖症で緊張気味の昌幸と、いままでにヨーロッパには何度も出かけ、ロンドンも三回めと言う麗華の普段と変わらない落ち着いた物腰がおもしろい対照を見せていた。

「こんな大きな金属の塊が空を飛ぶなんてことはどうしても信じられない……」

「……ぶっ」

搭乗を待つ間の昌幸の小さな呟きを耳にした麗華は、堪えきれず思わず吹き出した。

「きみが一緒じゃなければ絶対に乗りたくないね」

「わたしは、飛行機がどうして飛ぶかなんてかんがえたことなかったわ。それは墜落のニユースなんか見たあとに乗る時は少し気にはなつたけど。日本中を飛び回っていた若い頃、一度だけ、渋滞に巻き込まれて乗り遅れた飛行機が羽田空港の近くで墜落したことがあったのよ。もちろん凄いショックを受けて精神的に落ち込んだけど、その時に思ったの、あー、まだ神様はわたしを必要とされているんだなって。そんなことがあつてから自分の意志なんかではどうにもならない、神様がお決めになった運命みたいなものに従つて生きていくんだと思えるようになったの」

「僕は、高校生のときみと出会つて、なぜか別れてしまつたけれど、その時に、自分を納得させるために、これが神様のご意思なんだつて思うことにしたんだ。僕の手を使って絵を描かせているのも、こうしてきみと一緒にこれからの人生を生きていかれるようになったのも、もちろん、僕の永くて強い意志があつたし、きみの思いもあつたとは思つけれど、やっぱり、神様のご意思なんだと思うよ。そんなふうには理解はしているつもりだけど、いざ飛行機に乗つて何万メートルの上空へ、つて思うとね」

「そんなこと言つていないで男らしく覚悟を決めなさい。落つこちらなら、あなたの手を握つてわたしと一緒に死んであげるから」

「さっきの話しんだけど、交通渋滞に巻き込まれていなかったら、きみは今ここにはいないんだね。もしそうだったら、僕の人生つて一体何だつたんだろう」

「あの事故は、飛び立った直後で、空港のすぐ近くだったから何十人かは助かつたのよ。わたしは悪運が強いから、きつと生き残つていたと思つわ」

「悪運で言葉はともかく、僕みたいに、きみの歌声が大好きで、励まされる人、癒される人がたくさんいるんだから、やっぱりまだ

まだずーっと生きて頑張りなさいって言う意思なんだろうね」

こんなことを話し合っているうちに、搭乗が案内され、二人は機中の人に。

「前から一度聞こうと思っていたんだけど、きみは英語をどこで覚えたの？」

「大学が英文科だったし、アメリカに行く機会も多かったの。それに、言葉って、日本語も英語もフランス語もリズムが大切だって思うのよ。唄うことをお仕事にしてたぐらいだから、リズム感には恵まれてたし、本当はもつと大事なことがあるって思ってるけど、それはわたしの考えがきちんと纏まってから教えてあげる」

「わかるよ、よくわかる。ほら、前に鎌倉に一緒に行った時、僕の手がきみの歌声に乗って滑るようにスケッチ出来たことがあったけど、あれって、きみの歌声のパワーとリズムが描かせてくれたんだ。言葉と絵って全然違うことのようにだけど、本質的にはそれほど縁のないことじゃないんだよね」

「そうなのよ。学校では、動詞がどうだとか、前置詞が、なんて難しいことをいっぱい習ったのだけれど、実際にアメリカに行ってみて感じたのは、そんな文法なんかじゃなくて、単語の意味をたくさん知っていれば、あとは今言った、リズム感を大事にすれば、意外に思うほど会話って成立するって思ったわ」

「そうだね、僕だって、ややこしいことを殊更難しく教えてくれるから英語が苦手になったんだ。それに、きみみたいに素敵な先生がいたら、きっと英語は大好きで得意になってと思うよ」

「何言ってるのよ、じゃ、あなたの学校の美術の先生はきつと素敵な方だったの shouldn't you」

「いや、停年間近のおじさんだったから、これはあまり関係ないよだね」

7、イギリスにて

美術館主催の歓迎セレモニー、報道機関など関係方面への挨拶と、昌幸の最も苦手な堅苦しい行事が続いたが、通訳を必要としないほど堪能な麗華の語学力とアドバイスでどれも順調に進行した。

ある歓迎パーティーの席上、美術館副館長の夫人が麗華に何か話している。

「何ておっしゃっているの？」

「女性に年齢をお聞きするのはマナーに反しますが、あなたならお若いからお聞きしてもよろしいわね。だって」

「教えて差し上げたら」

麗華は本当の年齢を話したらしい。聞いた夫人は自分より十歳も年上のその事実が全く理解出来ないらしく、暗闇でふいに神様に遭遇したような、驚愕とも畏敬ともつかない表情を浮かべた。麗華の周りには自然に多くの人が集まってきていた。

「今度は、どうしたらそんなに若くいられるのか。ですって」

彼女は戸惑いながら昌幸に訳して聞かせた。

「それ、僕も前から不思議に思っていたんだ。聞きたいな」

「やめてよ、あなたまで。もう通訳してあげないから」

「ごめんごめん。でも、本当にきみって高校生のあの頃より、落ち着きや温かく人を包み込む包容力みたいなものは感じるけど、本質的な若さや美しさはまったく言っていないほど変わっていない。これって、物凄く不思議なことだよ」

「そうかなー、わたしは年齢相応になつてると思ってるけど」

こんな二人のやりとりを興味深げに周りの人達が見ている。何人かは日本語をある程度理解するらしく、通訳している。興味津々なからも上品な微笑みが二人に注がれている。

「じゃ、話してしまおうかな」

意を決したように言うと、麗華は先程の夫人を相手に控えめな口調で話し出した。

「わたし自身はそんなに若く見えるとは思っていませんが、もし、

そんな風にお感じになるとしたら、女性として、やっぱり大変嬉しいことです。ありがとうございます。そして、お尋ねの若く保つ秘訣なんて特別にありません。……しかし、一つだけ言えることは、心の底から愛することが出来る人と一緒にいられること、こんなことでしょうか。まだわたしはこの人と結婚して二ヶ月ちょっとですが、三十年以上前から、ずっとこの人のことを思ってきました。そんな人と再会した時に好かれるように、神様が若く保たせて下さったのかもしれない。いま、わたしはそう思っています」

広い会場が一瞬静まり返った。そして、万雷の拍手が轟いた。何かが起こったのかと係員が飛んで来るほどの拍手であった。

「何て言ったの？」

昌幸だけには、この麗華の言葉が理解出来ていなかった。

「これだけは教えてあげない」

朱に染まった頬に笑みを浮かべて、麗華は悪戯っぽく言った。

「いいよ。あとで通訳さんに聞くから」

「いじわるね、やめてよ。このパーティが終わったら教えてあげるから」

こんな二人の様子を見ながら、別の女性が何か言った。

「あなたは映画女優ですか？ だって」

「歌手ですって教えてあげたら」

麗華は、少し前まで歌手として活動していたと答えたようだ。

「ぜひ唄って欲しいとおっしゃってるのよ。どうしよう、発声練習も、歌の練習だつてしていないもの」

「大丈夫だよ。きみの歌声なら練習なんかしていなくても。それに、こういうこともあるかなと思ったから、内緒でカラオケテープ持って来たんだ。ただ、マイクなんかの設備はあるのかな？」

「えっ、本当？ じゃあ唄ってみようかな。でも、あなた手を握つて。じゃないと、こんな突然で頭の中が真っ白になってしまうて、とても唄えそうもないわ」

会場に急遽オーディオの設備が運び込まれ、麗華は歌を披露する

ことになった。

しーんと静まり返った会場に前奏が流れる。握った手を通して、少し震えているのが判る。

デビューから二十年以上が経とうとしているのに、当時と全く変わらぬ、透き通って伸びやかな高音、ゆったりとして深みを感じさせる低音、聞き入る人の心を掴んで離さない、魅力溢れる歌声が会場に流れる。どの人も麗華の歌声に酔っていた。感動していた。それほど素晴らしい歌声であった。

普通女性は、出産することに音程が下がり、音域も狭くなつてくると言われている。もちろん個人差はあるものの、殆どどの歌手にとってそれは避けられないことのものである。しかし、麗華の場合、全く変わっていない。むしろ年齢を重ねた分、声自体が艶やかになり、凄みをも感じるようになったといえよう。

あるテレビ局が、麗華の歌声に興味を持ち、デビュー当時のテープと現在のテープを音響研究所に持ち込み、細かな比較検査をしたことがあった。その結果、殆んど変化していないことが科学的に証明され、以来、日本歌謡界七不思議の一つと言われている。

麗華が一曲を歌い終わった。会場は、水を打ったような静けさのまま、拍手一つ沸きあがってこない。それほどの感動を与えたようだ。しばらくして、割れんばかりの歓声と拍手に包まれた。アンコールを求める声も止まない。おそらく、日本語の歌詞を理解できた人は何人もいなかったであろう。しかし、歌は万国語だということが実感出来る反響であった。

「ごめんなさい。ご訪問の目的は、わたしの歌なんかではなく、この人の絵画をイギリスの、より多くの人たちにご覧戴くことです。あと一曲だけでお許しください」

言つと、麗華はやや上気した頭を下げた。

「手も足も震えてた。あなた判つた？」

「もちろんわかつたよ。でも、不思議な体験をしたよ。きみの手

を通して、物凄いエネルギーみたいなものを感じたんだ。きみの歌声を聞くときにも感じるあの感動とは少し違う、僕のエネルギーときみのエネルギーが一体化した、何か強烈な熱の塊に自分の身体全体が包み込まれていくような、そんな感覚を受けたんだ。だから、しばらくは誰一人として動くことも、声を上げることも、拍手することすら出来なかったんだろうね」

「わたしにはわからないわ。……ずっと前テレビ局に取材されたデビュー当時と音程や音域が変わっていないってことも、ただ嬉しいって思ってた何かに感謝はするけど、パワーとか、今あなたが言ったエネルギーとかは、わたし自身意識したことないもの」

「……」
昌幸が、本当の意味の天使の存在を意識したのは、この時かもしれない。

前夜のパーティーの様子は、新聞各紙の紙面を賑やかに飾った。それに伴って予想された混乱は、美術館の徹底したガードによって最小限に抑えられ、個展は想像以上に静かな雰囲気の中で開場した。

美術館特設会場の広い空間に、七十点ほどの作品が展示されている。二ヶ所にソファアがさりげなく配置され、全体的にゆったりと落ち着いた雰囲気を出している。

展示された作品は、個々の絵のパワーや波長が干渉しないように、日本での場合と比較すると倍以上の間隔を取ってあった。目で見て心で鑑賞する、そんな昌幸の考え方が込められたスペースは、幻想的で繊細な作品の表情を引き立たせ、見る人に感動と安らぎを与えている。

京都祇園の町並みを歩く舞妓が鮮やかに描かれた作品がある。終わったばかりの夕焼けの余韻が僅かに残った空が印象的だ。お座敷にむかう二人の舞妓の後ろ姿が、まだ頼りない街灯の明るさとともに何かを語りかけてくる。花簪が美しく揺れている。

昌幸の絵画にとって大きな影響を与えた、上高地を描いた作品も何点が展示されている。

穂高連峰を梢越しに望む田代池湿原は、春の喜びを高らかに歌い上げる草花の生き生きとした表情が緻密で繊細なタッチで表現されている。全体を覆う朝靄が濃く薄く拡がる様は、幻想的な雰囲気に包まれている。じっと見てみると鳥たちの囀りさえ聞えてくるようだ。

奈良・興福寺の五重塔が若草山の山焼きの炎とたなびく煙の中に浮かび上がっている。着物姿の女性が美しく描かれている。後ろ姿は憂いに満ちて、見る人に様々なことを考えさせてくれる。

会場を訪れる人たちの鑑賞する時間は驚くほど永い。気に入った作品の前でじつと十五分、二十分という人も珍しくなく、初日の午前中だけでも、四十五分間佇んでいた人もあった。

この個展は、美術館の手配による通訳と係員に殆んど対応を任せたいという二人の考えで、担当の人たちは忙しく接客に追われている。

昌幸は、自分の作品をゆっくりと眺めていた。その時、急に室内がほんの少し暗くなったように感じ辺りを見回した。係員たちも怪訝そうな表情を浮かべている。麗華は、何か所用でもあるのか、姿が見えなかった。係員の一人が照明のスイッチを調整しようとした時麗華が戻ってきた。その瞬間、室内は元の明るさに戻った。

「えっ、なんだこれは」

係員も昌幸も思わず呟いた。

「どうしたの？ 何かあったの？」

麗華の言葉に、

「いや、何でもないよ」

昌幸は返事をしながら、そうだがこれが麗華の持つオーラのパワー

なんだとあらためてその凄さを感じていた。

「ねえ、お昼ご飯どうするの？」

麗華は自分の力には全く無頓着のようだ。

「そういえば、別室に美術館が用意してくれると言っていたよ」

「なにかな、楽しみだわ」

無邪気なものだ、様子を見に行つてつまみ食いでもしそうな表情であつた。

贅沢過ぎるほどの昼食をゆつたりと摂り終えた二人が会場に戻ると、副館長が駆け寄つてきた。

「どうされたのですか？ 何かありましたか？」

「ええ、先ほど連絡があつたのですが、明後日の午後、女王陛下がご来場になるといふことです」

「えつ……」

「……まさか、……そんな……」

あまりのことに二人とも言葉もない。

「陛下は、芸術美術にかなり興味をお持ちなんです。殊に、絵画は大変お好きなようで、この美術館にも何度もおいでになつていらつしゃいます」

「……でも、礼服なんて持つてきていないし……」

「大丈夫です。そんなに緊張されることはありませんよ。そのままでお迎え下さればよろしいかと思ひます。もともと気さくなお方ですし、私的なご来場ですから」

「……ありがとうございます」

さすがの麗華も少しほつとした表情を浮かべた。

午後も相変わらず大勢の人達が詰め掛け、それぞれ熱心に鑑賞していた。

二人には係員から、公爵、子爵とその都度紹介され、挨拶と絵画の説明をしたものの、あまりにも多く、その殆んどを覚え

られない有り様であった。時折訪れる日本人の商社マンや観光客の姿を見ると、別に知り合いというわけでもないのに、何かしらほっとしてしまふ妙な感覚を覚え、これが民族意識なのであるうかと思ったりしていた。

この頃から二人は、言葉を介さない会話を身に付けていったようだ。

「きみ、疲れていない？」

「わたしは平気よ。あなたより丈夫なのよ」

こんな会話が、俗に言うテレパシーを通して交わされていた。

もともと昌幸にはそのような能力はなかったが、麗華のエネルギーなのか、彼女との会話に限って交信出来るようになっていった。

今日の午後には女王陛下が来場されることになっている。

日本人にしては珍しく、十五年程前に一度拝謁したことがある麗華はさておき、昌幸は緊張せざるを得ない。用意された昼食も殆んど喉を通らなかった。

「わたしも緊張してるけど、大丈夫よ。同じ人間同士なんだし、イギリス第一の人格者ってお聞きしてるから、多少の失敗は笑って許してくださるわよ」

やはり、昌幸とは比較にならないほど麗華の器量は大きいらしい。午後二時、女王陛下が美術館長・バーナード卿の案内で会場に入っただけだった。

室内が何とも言えない温かな空気に満たされる。

女王は柔らかな笑みを浮かべ手を差し出された。昌幸は一瞬戸惑いながらも尊敬と感謝を込めて優しく握り返した。麗華は、サツと手を握り軽く腰をかがめた。その自然な仕草には優雅さが溢れていた。

「あなたには前に一度お会いしましたね。宮殿の中でしたかしら」

「はい、十五年前、日本の文化使節の一員としてご訪問させて頂

きました。覚えていて頂き感謝の気持ちで一杯でございます。ありがとうございます」

「あなたの、あの透き通った歌声はよく覚えています。また聞きたいものです」

「この人と結婚いたしましたして歌はもうやめようかと考えておりますが、女王陛下のお望みでしたら、いつでもご披露させていただきたいと思います」

「大勢の人たちからあなた方のことを聞き、また、テレビで作品を見ました。一度拝見したくてやってきました。一時間ほどありますので、ゆつくり鑑賞させてください」

緊張気味の通訳が丁寧に訳してくれた。

「ありがとうございます。ご尊顔を拝し、これ以上の光栄はございません。心ゆくまでご覧ください」

昌幸の声が心持震えている。

「緊張しないで」

気付いた麗華のその一言で、昌幸の肩からフツと余分な力が取り払われた。

女王はゆつくりと歩を進める。興味を惹かれる作品の前では、眼を近付け、あるいは全体を眺めるように少し離れてみたりと時間を掛けて鑑賞する。その表情も、穏やかな微笑みを浮かべられたり、何かを感じ取るうとするようにやや眉間を寄せたりと、豊かに変化する。

「……私も日本訪問の際に京都も訪れ、何ヶ所かの寺院を歩きましたが、あなたの作品を拝見すると、何か懐かしいような、心が癒されるような不思議な感覚を覚えますね。それは、デジャビュウ（既視感）とも少し違うような……。それより心のもっと深いところに自然に入り込んで来る様な心地よさ、と言ったほうがいいでしょうか、そんな気持ちになります」

「……ありがとうございます。私自身は殆んど意識することなく

描いています、そんな印象をお受けになられたとしたら、これ以上なく幸せに存じます」

「……あなただけに神がお与えになった才能なんでしょうね。永く心に残る作品だと思います」

最高の賛辞を残し、女王陛下は会場を後にされた。予定を三十分以上も超過していた。

「……驚いたわ。あんな昔のこと、それも、十分くらいお目にかかっただけよ。ちゃんと覚えていてくださってたなんて、信じられないわ」

「やつぱりきみは特別の人なんだよ。最初のご挨拶の時だって、優雅で気品があつて落ち着いていて凄く立派だった。僕なんて凡人だから緊張の極に達してしまつて頭の中は真っ白になっていた。きみのあの一言がなかつたら舞い上がったままで大変な失態を演じていたかもしれない」

「まさか女王様の前で手を握つてあげることなんか出来ないものね。あれがわたしの精一杯のことだったのよ。でも、あ後のあなたは決まつてたわよ。惚れ直してあげる」

「ありがとう」

二十日間の会期も六日目を終える頃、美術館の休館日に併せ、市内観光を楽しむ二人の姿があつた。日本国内と違い、あまり人目を気にしなくてもいいと思つていたものの、個展が始まつて三、四日間ぐらいは新聞、テレビの影響で、何処に行つても好奇心を含んだ視線に迎えられたが、それもこの頃になると少なくなり、やっと自由な街を見て廻ることが出来るようになった。

四度目のロンドン訪問という麗華にしてみれば、記憶にあるはずの町並みも何故か新鮮な趣を見せている。

初めて訪れた昌幸にとっては、眼に写る総ての風景に絵描きの本能を刺激され、地理を心得た麗華の案内で、西へ行つたり、東へ行

ったり、右手にスケッチブックを、左手に彼女の手を携えて、休日
を心ゆくまで愉しむことが出来た。

個展がちょうど十日目を迎えた日、麗華が言った。

「あなた、少しお話しがあるの」

「あらたまつて何？ 言い難いこと？」

「……前の主人に渡してきた子供のことなんだけど。……下の子
で、純って言うの。あなたも一度だけ会ったことがあるでしょ。…
…純はね、小さい頃から絵描きさんになるのが夢だつて言つたの
よ。その彼があなたのこの個展をどうしても見たいつて、昨日電話
してきたの。ほら、あなたがホテルのロビーで大東新聞の特派員の
方とお話ししてた時よ。それでね、昌幸さんもきつと喜んでくれる
から、ぜひいらっしやいつて言つてやつただけど……。あなた、
どう思う？」

「へーっ、純君が来てくれるの？ もちろん大歓迎だよ。絵の話
しも色々したいし、このロンドンの町も一緒にスケッチして歩きた
いね。そうだ、今度の休館日にも三人で歩こうか。彼は、きみの
素晴らしい感性を受け継いでいるはずだから、きつと画家としての
素質は充分あると思う。僕に出来ることがあれば何でもするよ」

「あなた、……ありがとう」

最後の方は言葉にならなかつた。

個展も会期は残すところあと七日となつた。

会場を訪れた男がゆっくり作品を鑑賞した後、受付に名刺を差し
出し、来意を告げた。

フランス・パリにあるルアン美術館副館長であつた。

通訳を介して伝えられた言葉は、

「この個展が終了した後、ルアン美術館で同様の個展開催を願つ
たというものであつた。勿論、芳幸達に異存があるはずはなかつた。
ただ、作品の殆んどは既にお買い手が付いてしまい、その了解を得る

必要があった。これは、美術館相互の協議の結果、総ての作品引渡しはフランス・パリでの個展終了後ということに承諾が得られ、パリでの個展は、驚くほどのスピードで日程他諸条件が決まった。

その日の午後、一人の青年がギャラリーに現れた。

会場で日本人駐在員夫妻とにこやかに談笑していた麗華の表情が一変した。見る間に涙が溢れ出し、言葉も忘れていた。しばらくして、

「……純、……」

「ああ、お母さん、こんにちは」

「……何がこんにちはよ。空港から電話するって言ってたから、ずっと携帯電話握り締めて待ってたのよ」

「日本の商社の人にそこまで連れて来て貰ったんだ。富士商の岩井さんって言うてた。名刺貰ったよ」

「あとでお礼の電話しておくわ。ちょっと絵を見ててね。いま、昌幸さん呼んで来るから」

「やあ、いらっしやい。遠い所大変だったね。疲れていないか？」

「はい、大丈夫です。ちゃんと飛行機の中で眠りましたから」

「ああそうか、君はお母さんと一緒に何度も外国は行ったことがあるんだね」

「はい、でも今思うと、あの頃きちんとスケッチでもしておけばよかつたなって思います」

「そうなんだよね。僕は日本の中なんだけど、また今度と違っても中々行けないことが多いね」

「純、こちらには何日間くらいいられるの？」

「わたしたちと同じホテルでいいわね」

昌幸の前で初めて見せる母親の顔であった。

「久しぶりなんだから、こちらにいる間はきみと一緒に部屋に泊まるといいよ。僕は別に一部屋用意してもらおうから」

「あなた、いいの？」

「そうだ、明日一日、きみを純君に預けよう。いいね」

「おじさん、僕いいです。この個展を見に来たんですから、毎日このギャラリーに来させてください。母には日本でいつでも会えますから」

「お母さんとも話していたんだが、明後日は休館日だから、一緒に町のスケッチに行こうか」

「えっ、いいんですか？ うれしいな。こういう絵を描く人のスケッチって一度見たかったんです」

「じゃ、決まったところでゆっくり絵を見てもらおうか。それぞれの作品の狙いとか、苦労した点なんかを話してあげよう。もっとも、私の場合、あまり苦労はしていないんだけどね」

一点一点丁寧に説明しながら、昌幸は、信じられないほど若く感じる麗華も、この時ばかりは、やっぱり母親なんだと妙な感慨を持っていた。

「純君は、日本画、洋画のどちらに興味を持っているの？」

「洋画です。それも、抽象画に凄く惹かれています」

「一枚の絵でも、その時々で色んなことを思ったり、考えたり出来るし、違った表情を見せてくれる抽象画は、私も好きなんだが、最近の作品はどうもね」

「どういうことですか？」

「何か薄っぺらな感じがするんだよ。私が自分の中で抽象画の評価を決める時、大切にしていることはね、その作品の前に立ってみて、どれだけ自分の思考が遊ぶことが出来るのか、何時間、いや、何分の単位でもいいから、その波動を受けていられるかってことだと思ってる」

「……」

「よく理解できないようだね。具体的に言うとな、どこかの絵画サークルなどの展覧会を見に行つてごらん、必ずと言っていいほど抽象画が何点かあるから、その絵の真正面に立って、じっとその波

動を受け止めてみるんだ。その時、何を感じたのか、何を思ったのか、そして、何分立っていられたかをよく覚えておくんだ。そして、あ、そうだ、ちょうどいい、ここにもピカソの作品などが何点かあるから、あとで見せて頂けるように頼んでおくけど、その作品の前に立って、受ける印象を比較してみるんだよ。そうするとね、抽象画ってこういうものなんだってことがよく判ってくるから。実に色んなことを考え、思い、一時間ぐらいはあっという間だよ。私はね、そういう作品が本当の抽象画だと思うんだ。もちろん、絵画サークルの作品の中にも素晴らしいものはあるとは思っけどね」

「……なんとなく、少し解って来た様な気がします」

「つまりね、抽象画って言うのは、描こうと思う対象を一度自分の中に取り込んで消化し、改めて自分の意識で構築していくものだと思うんだ。だから、それには、当然のこととして、具象画をきちんと描ける基礎の力が大切になると思うんだよ。確か、ピカソの若い頃の作品も所蔵しているはずだから、それもじっくり見ておくといい。素晴らしいものだよ」

「お願いします。凄く勉強になると思います」

「純君、君に今、私が一番言っておきたいことはね、抽象画に魅力を感じるのだったら、特に意識してデッサンや具象画の勉強をしっかりとっておきなさいってことなんだ。そういう基礎や実力の裏付けを身につけてから描く抽象画って言うのは、必ず、深みのある素晴らしいものになると思うんだよ。それに、これは大変重要なことなんだけど、君のDNAは、間違いなくお母さんの類稀な感性をしっかりと受け継いでいるから、これから何年か一生懸命勉強すれば、きっといい作品を創り出せると思うよ」

「ありがとうございます。今のお話し凄く勉強になりました。僕は今まで、抽象画は、頭の中に浮かぶものを描くのだから、想像力や感性、発想力を磨けばいいのかなと思っていました。そんな単純なものではないんですね」

純は眼を、顔を輝かせている。

「そうだね。抽象画というのは、ある意味では非常に難しい絵画だと思うよ。その分、自分の世界を一生求め続けて取り組めるものだと思うね。ただ、純君の場合、まだまだ若いんだから、あまり堅苦しく考えないで、自然体で色々な絵画の、色々な表現方法を覗いて欲しい。そんな時に、さっき私が言った、基礎の力が必ず生きてくると思っただ」

黙って二人の遣り取りを聞いていた麗華が、ポツリと言った。

「そうよね、絵も歌も、終わりと限界のない世界ですものね。純、一生がお勉強なのよ。覚悟は出来てる？」

「お母さん、それはどんな職業だっただと同じだと思っよ」

麗華も、昌幸と二人だけの時とは随分勝手が違うようだ。

英欧美術館の休館日、前日ピカソの絵画を堪能して興奮気味の純を連れ、昌幸と麗華は、ロンドンの町を歩いてきた。気に入った場所に来ると足を停めてスケッチブックを広げる。純には、基本的なことは既に身に付いている。

「……こうすると画面が広がっていくよね。……ここは描かない方が見る人の想像力をかき立てるんじゃないかな」

昌幸は丁寧にアドバイスしている。純は、総てを吸収しようともするように、一つ一つ納得するように真剣に聞き入っている。傍らで母親に戻ってしまった麗華は、心配そうな、頼もしそうな複雑な表情を浮かべて見守っていた。

純は四日間のロンドン滞在を終え、眼を輝かせ、胸を弾ませて帰国していった。

ヒースロー空港送迎デッキに昌幸と麗華の姿があった。

「わたし、飛行機のお見送りって嫌いよ。あつけないもの」

「そうだね、まさか、テープを引きずって飛び立つわけにはいかないだろうしね」

「ぶっ、いやだわ、想像しちゃった。変よねー。飛行機の尻尾か

ら何本ものテープがひらひらってたなびいていたりしたら、邪魔なものね」

「さあ、あと三日間、頑張ろう」

その夜、ホテルに戻ると国際電話があった。

「もしもし麗華？ どうなってるの？ こっちじゃ大騒ぎよ。毎日、新聞やテレビじゃあなたたちの話題で持ちきりよ。あなた、前から綺麗だったけど、スゴク輝いてた。日本じゃしばらくテレビなんか出なかつたじゃない、それが、こんな形でイギリスから報道されたから、こっちじゃもうシンデレラ並みの扱いよ。え？ ロンドンにも押しかけてるの、大変ね。それとね、私にまで帰国の予定を問い合わせてるのよ。知らないって言ってやったわ。本当はいつ帰ってくるの？ え、このあとフランスに廻るの？ へーっ、パリでも個展やるの？ よかつたじゃない、彼の夢が一遍に叶って。でも、無理しないでよ。疲れたと思ったらちゃんと昌幸さんに言って早めに休むのよ。わかった？ 若く見えてもお互い歳なんだから。エヘッ。ところで、あなたフランス語できるの？ 少しは、っていつ勉強したのよ。スゴいねあなたは。じゃ、くれぐれも無理だけはしないでね。二人が元気で帰って来るのを待ってるわ」

言うだけのことを言うと電話は切れた。涼子からであった。

もともと日本人は逆輸入、それも、ヨーロッパで認められたものに弱い。評価の付け難い絵画など芸術の世界についてはなおさらである。それは浮世絵の例を持ち出すまでもない。

「わたしのことなんかどうでもいいけど、あなたの絵、日本でもきつと評判になるわ。忙しくなるわね。わたしも一生懸命応援しなくては」

「自分の絵が高く評価されるのは嬉しいけど、僕は、きみに見せたくて、ただそれだけのために自分の世界を創り上げて来た様な気がする。いまの僕は、絵を描くことは本能に近いと思っているし、

それが大勢の人達に認められ、正直に言つて、戸惑う気持ちの方が強いんだ。そんな僕に絵を描かせている原動力はやっぱり、いつか涼子さんも言つていた情熱だと思う。それも、きみに対する情熱だよ。そんな情熱がきつといい絵を描かせてくれていると思うんだ。それより、きみ、大丈夫？ 疲れていない？」

「わたしは大丈夫よ。超の付くくらい忙しい芸能界で、それこそ時間に追いかけて生きてきたんだもの。あなたとは鍛え方が違うわよ。それとね、涼子には、フランス語少しは話せるって言つたけど、本当は自信ないの。テキストでしかお勉強してないから。ただ、美術館の方が通訳を付けてくれるって言つてたから、何とかなるって思つてるんだけど」

「いいよ。きみに通訳の仕事までさせて悪いと思つてる。でも、全然苦労しないで英語で話しているのを見ると、やっぱり、僕なんて単純に尊敬してしまうよ」

部屋の窓から、遠くにライトアップされたロンドンブリッジが眺められる。薄く霧が立ちこみ始めたのか、その灯りも霞んで、やがて見えなくなつた。

「大変大変、あなた起きて。お寝坊しちやつた。モーニングコールが鳴つただけけど、やっぱり歳ね、あなたの寝顔見てたらまた眠つちやつた」

「えつ、今何時？ あ、そうか、まだいいよ。きみは化粧なんかしなくても綺麗だから、あと十分、まどろみの時間を愉しもうよ」

「駄目よ。お食事をして、ちゃんと時間通り会場に行つていなくてはお客様に失礼よ。さあ、起きてお髭を剃つてちょうだい」

ホテルの食堂に入っていく二人を、ウェイター達が温かな笑顔で迎えてくれる。さあ、また忙しい一日の始まりだ。今日も充実した時間を送れますようにと祈りを込めて、二人はそつと眼を合わせた。今日はフォスター首相が夫人同伴で訪れると聞いている。

約束の十時丁度、首相夫妻がやわらかな笑顔と共に来場された。型通りの挨拶が済むと、

「今朝はあなたたちに刺激されて、久しぶりにワイフと腕を組んで散歩を楽しみました」

ポツと頬を赤らめながら、麗華は訳した。首相の話し方は歯切れがよくて、いつ聞いても気持ちがいい。

「すれ違う方に不愉快な思いをさせてはいけません。夫婦が仲がいいのを見て不快に感じる人はいないと思いますので、わたし達は日本でも手を繋いだり、腕を組んだりして散歩をしますわ。通りすがりのご夫婦に、あなた方もやっごらんさい、お互いの心が通い合うような気がして楽しいですよ。って思うことにしてるんです」

首相夫妻は、説明に熱心に耳を傾け、一点一点丁寧に長い時間を掛けて鑑賞された後、温和な空気を残して帰っていった。忙しい公務の間を縫って、一時間半にも亘る滞在であった。

充実した、そして、最高の称賛を得た個展は無事終了した。イギリスの著名な人々は殆んど足を運んでくれた。

これほどの成功は予想もしていなかった。しかし、昌幸は、飽くまでもそれに浮かれることなく、いつまで経っても誠実な、そしてごく普通の人間でありたい、そう努力しようと心に誓った。

困ったことは、テレビ局から麗華への出演依頼が殺到したことであった。それら総てを、

「これからの人生は、この人と静かに歩いていきたい」と断った。

明日はいよいよパリへ、という夜、昌幸は言った。

「これほどの大成功なんて予想もしていなかった。まだ長い夢の中にいるような気がする。夜中にふと目が覚めて、隣のベッドにきみがいるのを確認して何度も自分の頬を抓っていた。これも、全て

きみのお蔭だと思っっているし、きみに逢わせてくれた神様のお蔭だと思っっている。言葉では表現出来ないくらい感謝している。本当にありがとう

「わたしこそ、女王様にまたお会いできるなんて思ってもみなかつたわ。いろんな人ともお知り合いになれたし、純のことだって、あなたに感謝しきれないほどだわ。わたしの方こそ、ありがとう。あ・な・た」

麗華は静かに言った。

「でも、あまり幸せすぎるから、少し恐い気がする。いつまでもこの幸せは続くのかしら」

「続けなくっちゃ。なんと言っても三十年も我慢してきたんだから、きつと神様がその埋め合わせをしてくれているんだよ」

「……そうね」

「僕はね、今のこの幸せに感謝して、神様について言うか、いままで僕達に関わってきた全ての人に、いや、そんな限定した人達じゃなくて、うまく言えないんだけど、社会に対して恩返しみたいなことが何か出来ないかなと思っっているんだけど、きみはどう思う？」

「……わたし？ わたしも何かしたいって思うけど、あなたの気持ちとは少し違うの。もちろん、今のわたし達の幸せに感謝するって気持ちはあなたと同じよ。でもね、その気持ちと、感謝を形として表現することって違うと思うのよ。……神様に対する感謝、あなたがわたしに、わたしがあなたに感謝する気持ちのほかにも、わざわざ個展を見に来てくださった人達や、絵を買ってくださった人達、そんな今の関わりばかりじゃなくて、いままでわたし達を支えてくださった人達、そう考えると物凄く大勢の人達がいて、はじめてわたし達のこの幸せがあるのよ。そんな人達全てに、こころの底から感謝するわ。でもね、社会に対して何かをするってことは少し違うと思う。感謝の気持ちは気持ちとして、わたし達が心の中にそっと持ち続けていけばいいと思うわ。そのことは全然別の次元で、社会に対して何かをさせて頂くってことは出来ると思うの。極端に

言えば、困ってる人がいたら黙って手を差し伸べることって、人として自然なことじゃない？ その時自分が幸せだとか不幸せだとかとは関係ないことじゃないかしら。ごめんなさい、偉そうなこと言っ
つて」

「……そうなんだ、そういうことなんだね。僕こそ、社会に対して何かをする、なんて偉そうに思っていた。そうじゃなくて、何かをさせて頂くって考えないと、凄く嫌味な、驕り昂ぶった事になってしまうんだね。もちろん、それとは別に、僕なんかもっともっと自分を磨かなきゃいけない」

昌幸は、麗華の言葉に、頭を何かで殴られたような衝撃を感じていた。自分とは比較にならない麗華の人間としての温かさ、聡明さの一端に触れ、感動していた。

「エリザベス・サンダースホームのマザー・テレサも、ダイアナ妃も、オードリー・ヘプバーンだって、彼女達が幸せだったからしていた活動っていうより、そんな事とは関係のない、もっと自然な人間としてしなくちゃならない活動だったんだよね。テレビの報道を通してしか知らないけど、そう考えて初めてあの外連味のない温かさ、崇高さが理解できるような気がするよ」

「あなたの、何かをしたいって気持ち、物凄く嬉しいし、貴重なことだっと思う。小さな事でいいから、わたし達で何が出来るか、一生懸命考えてみましょうよ。きっと見付けられるって思うわ」

「そうだね、きみに言われて気付いたんだけど、社会に対して、何かをさせて頂くなんて、そんな大上段に振りかぶらないで、もっと自然に、素直に考えた方がいいかもしれないね」

イギリス・ロンドンでの個展を充実のうちに終えた二人は、その夜遅くまで語り合った。

(続

く)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5622t/>

幻象画（?）

2011年5月27日08時12分発行